

しいむじな

発行
千葉県立中央博物館
房総の山のフィールド・ミュージアム

連絡先
〒260-8682
千葉市中央区青葉町955-2
TEL:043-265-3111

<http://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/special/yama/>
2020(令和2)年9月発行



特集

一本のエノキ



写真
エノキ倒木へ産卵に訪れたヤマトタムシの雌(2020.8.13 清澄山系にて)。晴天の日に活動するヤマトタムシも、真夏の炎天下ではさすがに日陰となる倒木の下面に止まっていた。

エノキは本州から九州に自生している落葉樹で、植栽されることも多く、社寺の境内や公園などでも普通に見られる樹木です。巨木に育った見事なエノキは各地で人々に大切にされています。

国蝶のオオムラサキやゴマダラチョウ、最近よく見られるようになったアカボシゴマダラ(外来種の蝶)は、幼虫がエノキの葉を食べて育ちます。枯れ木からは美しい色のヤマトタムシが発生します。ヤマトタムシは法隆寺の国宝「玉虫厨子」の装飾にこの虫の翅が用いられたので、ご存知の方も多いと思います。ヤマトタムシは成虫、幼虫共にエノキを食べます。また、エノキの枯れ木に生えるキノコも、多くの昆虫の食べものとなります。

身近なエノキですが、枯れてからの様子を見る機会はありません。二年前、山中で一本のエノキが伐倒されました。その後の変化の様子と、このエノキにまつわる昆虫をご紹介します。

(斉藤明子)

房総の山のフィールド・ミュージアムとは

房総の山を舞台に、地域の自然や文化そのものを「資料」や「展示物」としてとらえる、千葉県立中央博物館によるフィールド事業の一環です。観察会を開催したり、旧君津市立三島小学校の校舎を利用した「教室博物館」を拠点として、地域の方々のご協力をいただきながら、資料の収集や調査・研究等の活動を行っています。

おしらせ

新型コロナウイルスの感染防止のため、今年の3月初旬から臨時休館となっていました三島小教室博物館は、真っ青な夏空のもと、8月14日(金)に再開しました(写真①)。当日は暑さが厳しく、短いホースで何度も水まきをして涼をとりながら、開館の準備をしました(写真②)。午後からは6名の方が来館し、三密にならないよう、教室の外で話がはずんでいました。

今年度から、教室博物館は毎月第2、第4金曜日11時~16時半の月2回開館となっております。開館日にご注意ください。また10月以降は、感染拡大防止の対策を取った上で、行事を再開します。詳しくは千葉県立中央博物館のウェブサイト(www2.chiba-muse.or.jp/NATURAL/)等でお知らせしています。トップページのメニュー「イベント」>講座・観察会等をご覧ください。(八木令子)

写真① 夏の青空に映える旧三島小校舎
写真② 夏草でおおわれていた教室博物館入口、この後草を刈って入りやすくしました



連載

小櫃川流域の生きもの サシバ ~ヘビをつかむ~

写真1:サシバ
2007.4.11 木更津市



写真2:ヘビをつかむサシバ
2020.7.2 木更津市

「出かけるよ」と梅雨の貴重な晴れ間、いそいそと出かけた。行先は、ここ、2~3年行っていない近くの谷津。この時期、一年中で虫が最も多く、年々減少するヘビもしばしば姿を現す。新しい発見があるかな?と谷津に入っていく。入り口付近の水田に稲が青々と育っていた。しかし、堰の岸辺に毎年いたヘビもいないし、虫も少ない。昨年の台風の影響か?と思いつつ、農道を上っていくと樹林の枝の間から見える青空に入道雲がモクモクと沸き上がっている。その時、一声、「クッ、ピョウ」と鋭い鳴き声があった。空中で2羽のカラス大の茶色の鳥が絡み合っていた。サシバ!大急ぎで、シャッターを切ったが、すぐに視界から消えた。

自宅のパソコンでサシバの写真を拡大すると脚の位置に輪が光

ってみえる。「脚の怪我?」と考えたが、よくよく見るとヘビをつかんでいると思った。この場所で、ヘビを捕らえた姿を見たのは初めてであった。ヘビはサシバが好んで食べるえさの一つである。「2羽が獲物のヘビを奪い合っていたのか?」と想像したが、ベテランの野鳥観察家の意見を聞くと「サシバ夫婦が、子育て中で、オスが捕らえたヘビをメスにヒナのえさとして渡したのでは?」という。この付近では1970年代から、サシバが毎年、ヒナを育てていたが、放棄谷津田が年々増えているので、サシバがもう来ないのでは?と心配していた。しかし、サシバが繁殖できる環境が未だに整っているのに安心したと同時にこれが継続すると良いなと思った。

参考文献 千葉県の保護上重要な野生生物—千葉県レッドリスト—動物編2019年度版。千葉県史料研究財団編2002『千葉県の自然誌本編6』
(文・写真 千葉県立中央博物館ボランティア 成田篤彦)

しいむじなの由来



房総の山のフィールド・ミュージアムのニュースレターのタイトル「しいむじな」は、アナグマをさす房総丘陵の方言です。ムジナは地域によってアナグマやタヌキをさすなど様々なのですが、千葉県内ではアナグマのことが多いようです。房総丘陵の人々は、大きなスダジイの木のウロに棲んでいるムジナを、愛情を込めて「しいむじな」と呼んでいます。

今年の夏は連日、コロナと熱中症対策が話題となりましたが、皆様どのように過ごされたのでしょうか。

休館が続いていた三島小教室博物館が再開されたのは明るい話題ですが、今年度「山の学校」が一度も開催できないことは残念でなりません。博物館は野外での活動と一体となつてこそ、真価を発揮するといふべく当たり前のことが再認識されたように思います。十月から行事も再開されますが、まだ当面この状況が続くのであれば、「ウィズコロナ」の博物館活動を考えていかななくてはならないのかもしれないです。

(八木令子)

編集後記



写真1 貝殻坂の地層とナミガイの化石(ねじり鎌の長さ約二五センチ、写真の上が地層の上位)



写真2 ナミガイの化石(殻長約九・五センチ、写真1と同じ個体)



写真3 現在の海で採取されたナミガイ(殻長約十一・五センチ、殻から出ている長い軟体部が水管、三河湾産)成長したナミガイは、砂泥中から一度掘り出されると、自力で潜ることができず、水管を殻の中におさめることもできません。

貝殻坂を歩くと、地層という小さな「のぞき窓」を通して、当時の海底の様子を見ているような気分になります。観察できるものは、その時々で異なり、まさに一期一会。貝殻坂で、ナミガイの化石が見たい方は、地層が洗われて新鮮な面が出る雨上がりがおすすです。

(千葉友樹)

コラム

房総丘陵の動植物(18)

ナミガイの化石—生きていた姿勢のまま地層に眠る二枚貝—

木更津市永井の貝殻坂では、約三〇万年前の浅海に堆積した地層(下総層群)が観察できます。平成十七年度には、県環境生活部の依頼を受け、中央博物館が中心となって調査を行いました。重機を使って地層を連続的に観察できるようにしたため、貝・フジツボ・カニなど多数の化石が見つかりました。現在では、地層の一部が草木に覆われてしまいましたが、地層と化石の観察ができる貴重な

な場所です。

地層を観察すると、二枚貝の化石が見つかります。中には、二枚の殻が合わり、殻の長軸方向が地層の水平面とほぼ垂直に交わるものもあります(写真1)。(2)ナミガイの化石です。どうして、ナミガイの化石は二枚の殻が合わり、地層にほぼ垂直に立ったような姿勢で見つかるのでしょうか。この謎を解くために、ナミガイがどんな二枚貝か紹介します。

ナミガイは現在の東京湾や三河湾にも生息しており、市場では「白みる」の名

で流通しています。貝殻からはみ出す長い軟体部は水管と呼ばれ、刺身になると淡泊ながら、滋味深い味わいです(写真3)。ナミガイは見た目のインパクトもさることながら、おもしろい生態を持っています。水管の先端を海底面上に出して、そこから海水中の有機物を吸い込んで食べていて、砂泥中にほぼ垂直に立ったような姿勢で潜って暮らしています。成長したナミガイの長い水管は、砂泥中に深く潜って海水中の有機物を食べることを可能にします。このため、たとえ台風で海が荒れても、砂泥中から掘り出されることはほとんどありません。ナミガイの仲間には長寿な二枚貝で、一〇〇年以上生きる個体もいることから、砂泥中に深く潜ることで、一生の間に幾度も台

風を乗り越えていることがわかります。成長したナミガイが砂泥中から掘り出されるのは、潜水漁によって人間に引っぱり出された時にほぼ限られるようです。このような生態を持つているため、ナミガイは生きていた姿勢のまま地層中に保存されるのでしょうか。しかし、大規模な台風の場合、ナミガイも砂泥中でじつとしていただけではないようです。私はまだ見たことがありませんが、ナミガイの化石の上下で、台風時に形成された地層の縞模様様が切られていることがあり、砂泥が急に積もったり、削られたりした場合に、ナミガイが生息位置を調整した痕跡と考えられています。ナミガイが生きていくためには、水管の先端を海底面上に出して有機物が食べられる、ち

特集

森の生きものを育む一本のエノキ

清澄山系の山中で一本のエノキの大木が伐倒されました(写真1)。写真2は伐倒されて半年近くが経った一昨年五月の様子です。落葉後の冬に切られたので葉っぱはありませんが、幹の様子は生きていた時とそれほど大きな変化はありません。古木だったこのエノキの幹には、ヒガンマムシグサの雌株が着生していました。鳥が種を運んで、枝の又に溜まった土壌に何年も前から着生していたエノキの匂いに誘われて、ヤマトタマムシが産卵に訪れていました。写真3はさらに二年後の今年7月の様子です。樹皮にはチリメンタケの仲間やコケが生え、すっかり様子が変わっています。ヒガンマムシグサは消えてしまいました。二年前に産卵されたヤマトタマムシが早くも成虫となって、材から出た時の孔がたくさん開いていました。ヤマトタマムシの幼虫は材の中を掘りながら食い進み、やがて蛹になり、羽化した成虫はやや横長の特徴的な形をした孔を開けて外に出てきます。孔から頭だけ出して息絶えているものも見られました(写真4)。孔を開ける作業は難儀なことです。樹皮にはタマムシの開けた孔以外に、大きさの違う孔もたくさん見られます。キクイムシやカミキリムシ

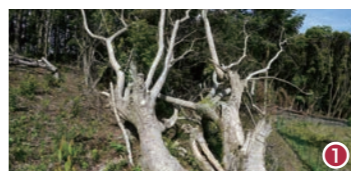


写真1 伐倒されたエノキの大木
写真2 2018年5月28日
写真3 2020年7月2日
写真4 孔から脱出しきれずに死んだヤマトタマムシ
写真5 ルリオオキノコ(体長約8ミリ)
写真6 キノコヒゲナガゾウムシ(体長約8ミリ)
写真7 オオキバチビヒラタムシ(体長約4ミリ)

など他の食材性の甲虫がこのエノキから発生した証拠です。また、これらの穴は小さな甲虫やダンゴムシなど他の生きものの良い隠れ処となっているようです。樹皮に生えたチリメンタケの仲間などのキノコには、ルリオオキノコ(写真5)やキノコヒゲナガゾウムシ(写真6)などの食菌性の甲虫が集まっています。フトナガニジゴミムシタマシの集団も見られました。生きものが賑やかな五〜七月は、このエノキに集まる虫たちの様子を見ていると飽きません。

樹皮下や樹皮のすき間には、わずか二〜三ミリの甲虫が潜んでいます。昨年の調査では、この一本のエノキにチビヒラタムシ科の甲虫が八種類も生息していることが確認されました。チビヒラタムシは体長が四ミリにも満たない小さく平たい甲虫ですが、中でもオオキバチビヒラタムシの雄はクワガタムシのように大きな大顎を持っています(写真7)。エノキの樹皮の下で雄同士が雌をめぐつてこの大顎を使ってけんかをしてい

るのでしょうか。想像すると楽しいですね。今年もこのエノキにはヤマトタマムシが産卵に来ていた(表紙写真)ので、この先、数年間は毎年羽化が観察できるはずです。さらに時が経てば、また別の昆虫や菌類に利用されていくのでしょうか。エノキは、葉がチョウウなどの食べものとなり、野鳥たちが実をついばみ枯木となつてからも、長い間多くの生きものを育む森の大切な存在です。多くの昆虫や菌類に食い尽くされてやがて朽ち果てるまで、これからもこの一本のエノキを見届けたいものです。(斉藤明子)